

みどころ

滋賀県立琵琶湖博物館は、湖をテーマにした日本最大規模の博物館として知られ、B展示室「人と琵琶湖の歴史」では「湖に生きるひとびと」が取り上げられている。そこには漁師の家の実物大復元模型や、エリの模型、タモアミなどの実物の漁具が展示され、琵琶湖の伝統的漁法について詳しく知ることができる。



琵琶湖博物館



アユ



イサザ



ウガイ



オイカワ



ゲンゴロウブナ



ニゴロブナ



ビワコオオナマス



イワトコオオナマス



ビワマス

[アクセス]

●県内一円 水のある所

[もっと詳しく知りたいひとへの案内]

(関連文献 / 関連施設)

●琵琶湖博物館

TEL 077-568-4811

びわ湖の伝統的漁法

滋賀県内一円



湖西の鮎 (びわこビジターズビューロー提供)

「生物進化の展示会場」。日本最大最古の湖である琵琶湖はこのように呼ばれるほど、たくさんの固有種をはぐくんできた。近年話題の生物多様性も琵琶湖についてはこの固有種の多さによって特徴づけられる。

そして近江には、こうした魚介類を日々の食事のなかで楽しむという独特の食文化があり、その食材もまた広大な琵琶湖の多様な漁場環境に応じた独特の漁法によって提供を受けている。

琵琶湖固有の環境と生物多様性は、それに応じて琵琶湖独特の漁法を発達させ、近江の伝統的食文化もはぐくんできた。琵琶湖が生んだ水の宝といえよう。





チュウビキアミ漁（ゴリ曳き）



颯爽と港に帰る漁船

びわ湖の伝統的漁法

所在地 県内一円

広大な琵琶湖では、その多様な漁場環境に応じた独特の漁法が展開している。沖合いの漁法、湖岸・内湖の漁法、河川の漁法がそれである。

沖合いの漁法

チュウビキアミ漁（沖曳網漁）、カイビキアミ漁（貝曳網漁）、エビタツベ漁、オキスクイアミ漁（沖すくい網漁）などがある。チュウビキアミ漁は底曳き網を漁船で曳く。主な獲物は夏にはウロリ（ヨシノボリの稚魚）、冬はイサザ、エビなどがある。カイビキアミ漁は鉄製のマンガを沈めて船で曳き湖底の貝を掻き獲る。シジミ、ドブガイ、イシガイなどが獲れる。エビタツベ漁は円筒形のワナカゴ（エビタツベ）を、延縄式にたくさん仕掛けてテナガエビやコエビを獲る。オキスクイアミ漁は沖合いの水面に群れるコアユを網ですくい獲る。かつては舳

先に乗った人がタモアミですくっていたが、今は鉄枠付きの網を船につけてコアユの群れに突っ込んですくい獲る。

湖岸・内湖の漁法

エリ漁、オイサデ漁、モンドリ漁などがある。エリ漁は定置網漁の一種で、竹箆や木杭などを湖底に立ててカギ型の迷路をつくる。魚が障害物（エリの竹箆）にぶつかりとそれに沿って移動する習性を利用して、狭い囲いの内（ツボ）に誘導してつかまえる。獲物はコイ、フナ、アユ、モロコ、オイカワ、ウナギなど、多種にわたる。オイサデ漁は湖岸の浅いところに群れるコアユを、カラスの羽根をつけた追い棒で追い込んでサデ網ですくい獲る。モンドリ漁は魚の通り道にモンドリを仕掛けて捕まえる。モンドリとは釜（ウケ）と呼ばれるカゴ状漁具のこと



オイサデ漁



四ツ手網漁



ノボリヤナ

で、このなかに入った魚は出られない仕掛けになっている。主要な獲物は産卵期に遡上してきたコイなどである。

河川の漁法

四ツ手網漁、築漁などがある。四ツ手網漁は河口付近に遡上してきた魚を、船上から四ツ手網ですくい獲る。船と網との位置関係などの作法に河川ごとの特色が見られる。ヤナ漁（築漁）は、川に簀を立てて魚の行く手をさえぎって捕まえる。遡上する魚を捕まえるノボリヤナと、川を下ってくる魚を捕まえるクダリヤナがあるが、現在はほとんどがノボリヤナである。

琵琶湖漁業の特徴

琵琶湖では漁法の改良による多獲指向は顕著でなく、内水面という限られた漁場で、漁業を持続させるための指向が見られる。集魚灯、魚群探知機の禁止に見られるように、魚群を一気に大量漁獲することを自制していることもその現れである。琵琶湖ではこうした背景のもと、現在に至るまで伝統的漁法が多く伝えられてきた。それを特徴づけるのが魚の習性をうまく利用して捕獲する「待ち」の漁法であり、その代表が現在も琵琶湖独特の景観を形成するエリである。